

## ■ 随 想 ■

## 千歳壽一先生をお迎えした頃

式 正 英

1991（平成3）年2月7日、私は東京都庁をお訪ねし、総務局長と総務部長にお会いした。続けて浜松町にある東京都職員研修所に伺い、所長や次長にお会いした。当時、都の職員としてお勤めであられた千歳壽一先生を、お茶の水女子大学の専任教官としてお迎えする為、教室主任として都に割愛をお願いに行った訳である。既に形式的な段階ではあったが、官庁間の社会的儀礼として経過する必要があった。先生はこの話を喜んで受けられ、都の定年前ではあったが退職され、新規採用で4月、本学にお見えになったと覚えている。得難い方に来て戴けて有り難かったし、八方円満に進んだ人事であった。

一般教育科目「情報学」に定員が付いたのは1986（昭和61）年だったが、どの学部にも所属させるか、どの学科が面倒を見るかが先ず議論の種となった。井内昇先生が当時一般教育委員長等を勤められ、御専門の上でも都市機能分析に数値情報を基にした多変量解析等を得意分野とされていたし、情報学関連への御造詣の深さも手伝って曲折はあったものの地理学科がお世話する事になった。その結果、同年11月、当時計量地理学分野で最も活躍の目覚ましかつた久保幸夫先生を情報学の専任講師としてお迎えする事になった。久保先生の場合は研究中の事情から中型コンピューターを移設する必要があり、それを容れる部屋を用意する前提があったが、浅海重夫先生の御配慮で是をクリアーし、お出まし戴けた。その機器はそ

の頃、既にお茶大に設置されていたコンピューターの性能を凌ぐものとも伺った。

久保先生在任中には、その御努力もあって大学の情報処理センターの機器も更新されて、情報化時代に即応できる様になった。同先生は地理学科プロパーの学生指導等にも積極的に参加されたが、在任僅か5年弱で新設の慶応大学環境情報学部へ転任される事になった。転任の御希望が伝えられたのが前年の秋で、それから新人事に取組むのは少々難事になるかとも思われたが、関係者の助力や努力が実って、上述の次第で久保先生の後を千歳先生が引継がれたのである。

千歳先生は私の7年程東京大学での後輩であるが、お茶大に赴任される2年程前まで存知上げてはいなかった。専門違い、旧制と新制の違いと言う事もあるが、一層の差はコンピューターに馴染むか否かの時代差が大きい様に思われる。私の世代の者にはワープロの使用さえ拒否を示す連中がいる。1972年在外研究中の体験であるが、アメリカでは既にアーツ衛星のデータ処理する為、全国の大学を繋ぐコンピューター・ネットワークが出来ていた。当時の日本の情報処理技術は遠く及んでいなかった。アメリカからのプッシュも二進法教育の普及もあったであろうが、その頃から若い世代の研鑽があつてコンピューター社会へと日本が転換して行ったと思う。年齢的にも千歳先生はその若い世代の先頭に立たれていた事になる。

## お茶の水女子大学周辺の都市整備

正 井 泰 夫

千歳壽一先生は、東京の都市整備に長年の経験と深い知識をもった方である。先生のご退官

にあやかって、私の知っているお茶大周辺の都市整備について少し思い出してみた。

私はお茶大のすぐ南側の小日向二丁目の住宅地で生まれた。昭和4年のことで、当時は東京府東京市小日向台町一丁目と呼ばれていた。小日向という地名は江戸時代初期にすでにあったが、今の江戸川橋辺りが中心だった。江戸の町が拡大し、小日向台の上にも侍屋敷や小さな小日向台町と呼ばれる町屋ができた。そのすぐ北側には安藤長門守の下屋敷があったが、明治以後、長く陸軍用地となっていた。小学生の頃、この陸軍施設は移転し、荒地となっていたところもあったが（今の筑波大付属中高）、東京女子高等師範学校はもうここにあった。関東大震災で御茶ノ水で焼けて後、昭和7年にこの大塚の地に新しいキャンパスをオープンさせていたのだ。

震災後、この陸軍用地を分割して、その北半分を女高師が使うことになったのだが、正（東）門のある市電通り（現春日通り）の向かい側にあった大塚窪町の住民は、陸軍用地の全面的宅地化を求めた。妥協の産物として、市電通り沿いの20メートル幅の土地はキャンパス外となり、僅かに正門だけが大通りに面するという形になった。この細長い土地に、その後の曲折をへて、戦後になって桜蔭会館などが建てられた。

戦争中、中学生だった私たちは、女高師正門前やや右手で建物強制疎開に動員された。都電通り

から直角に東京文理大・高師の裏手にかけて建物を連続的に引き倒し、防火帯をつくった。しかし、これはあまり効果がなく、終戦の年の5月25日夜の最後の空襲でまわりは延焼で焼けてしまったが、仲町寄りの一部は女高師の風下側となり助かった。

戦後、東京は壮大な道路計画を建てた。茗溪会館の前から斜めに広い道がつくられ、下に地下鉄丸の内線が建設された。強制疎開の跡地は、ほとんど家が建った。茗荷谷駅の前の都電通りは東側が拡幅されたので、今もほぼ昔の形で残っている女子アパートは数メートル東へ移動させられた。窪町小学校の敷地の一部もけずられた。

戦時中、女高師裏にはまだたくさんの弾薬庫用の土手が残っていた。道路反対側の中学の生徒だった私たちは、そこで時々草滑りをして遊んだ。今の文京七中のところである。音羽へ抜ける峡谷状の切り通しの道は戦争中につくられた。それまでは音羽へ出るには跡見の前を通過して、ねずみ坂という急な坂を使っていたのだ。東京有数の急崖の音羽の東斜面は、こうして自動車・消防車・軍用車が通れるようになった。低い2階屋が連続して小日向台から見おろされていた音羽の街は、現在は拡幅をともなって高層ビル・アパートの街となり、小日向台の住宅地を見おろすようになった。

## 千歳先生のプロフィール

### 井内 昇

千歳壽一先生は大学の地理学科で私の1年先輩でしたから、おつき合いはもう40年以上になります。この間に僅か2年間でしたがお茶大地理学科と一緒に働いたことは、私の社会人生活の中で忘れられない思い出の一つになっています。

1990年の秋、「情報学」担当の久保先生の他大学への転出が急に決まり、「情報学」所管の地理学科は急いで後任者を探すことになりましたが、それには諸般の事情から多くの困難が予想されました。そういう中で、それまでお茶大地理学科とはご縁がなかった千歳先生の名前が候補者の中に浮かび上がったのは、先生が地理学出身の数少ない計画行政の専門家であると共に、コンピュータ関連業務でも優れた実績をお持ちだ

ったからです。今でこそコンピュータの達人は大勢いますが、千歳先生はすでに60年代前半から都庁の行政事務処理のコンピュータ化に取り組み、その後もコンピュータ関連の行政・研修等の分野で活躍してこられました。一方、本来の仕事である大都市圏計画の分野では、東京大都市問題企画・調査部門のチーフとして、お手のもののコンピュータを縦横に駆使して多くの調査結果をまとめあげられました。このような都庁のコンピュータ関連の諸分野での活躍と共に、大都市問題の計量地理学的研究により理学博士号を授与された経歴から、「情報学」担当の適任者としてお迎えすることになりました。

お茶大着任後の千歳先生の地理学科及び大学